【読書ノート】

# 市民共同体から市民社会へ

## —おわかれに—

市　川　泰治郎

1

### サミール・アミンの問題提起

第三世界からは人の意表を衝くような発言がときどきあらわれる。サミール・アミン[1]の次の一文もそうである。

「いわば下層土となるような社会をもたない新しい土地にヨーロッパ人が入植して構築した社会構成たるニューイングランド，カナダ，ボア人南アフリカ，オーストラリアおよびニュージーランドは範疇的にいって＜中心と周辺から成る世界＝システムにおいては＞周辺部ではない。また＜生産様式からいって＞貢納制でも資本主義でもない＜ものとして発足した＞。中心のヨーロッパ資本主義の生成と当初から密着して形成された例外的なものである。ここではそれらを『若い中心』と呼ぶことにしよう。」[2]「この『若い中心部構成』の基

（1）　サミール・アミン1931年エジプト生まれ。50年代末のアフリカ革命の高揚と挫折（ざせつ）の体験から，「周辺理論」で知られる独自の世界資本主義，新植民地主義論を構築。エジプトの開発行政機関に勤務するが，ナセル政権に追われ60年，マリへ亡命，同国経済顧問になる。パリで『ラ・レボリュシオン』誌同人に加わるなどの活動をへて，70年からセネガル・ダカールの国連アフリカ経済開発計画研究所長に。その理論は60年代以降の第3世界解放理論や革命家に大きな影響を与えた。主著に『不等価交換と価値法則』（花崎杲平訳，亜紀書房），『帝国主義と不均等発展』（北沢正雄訳，第3書館）。（1981. 6. 16. 朝日新聞による）

（2）　Samir Amin, *Unequal Exchange*, (Eng. ed.) MRP, 1976 (original, French, 1973) p. 57.

礎をなすのは単純商品生産様式が＜他の生産様式を＞圧倒していた事実であり，そのゆえにかれらは資本主義生産様式の完全な開花へ向って自力で発展してゆくことが出来たのである。」(3)「単純商品生産様式の支配は歴史上きわめて例外的なことである。それは1600—1750年のニューイングランド，1600—1880年のボア人南アフリカ，白人入植から資本主義生起までのオーストラリアとニュージーランドとにおいてのみ見られたところである。それらは小規模富農と自由な手工業者との社会で，そこには単純商品生産様式が貢納制または奴隷制の生産様式に従属せずに主要な社会組織様式をなしていた。この社会はイギリス（二次的にはオランダとフランス）で封建制度が解体されたときの副産物であったということを知らないと，この辺の説明は困難である。」(4)

単純商品生産様式とは周知のとおりイギリスではヨーマン(5)として知られた独立生産者に対応する生産様式であるがアミンの場合には特に重要な意義を与えられているものである。すなわちアミンはマルクスが有名な唯物史観の定式において原始共同体以来ヨーロッパの視野のうちに拡がる生産様式としてアジア的生産様式，古典古代（奴隷制），中世封建（農奴制）および資本主義を挙げているのに対し，もっと世界的な見地から次の五つの生産様式に整理するので

---

（3）Do. p. 222.

（4）Do. p. 21. ＜……＞は引用者のもの。以下同じ。

（5）ヨーマン Yeoman とは年収40ポンド以上の土地保有者を指すと一般に規定されているけれども収入だけで区分するのは人口一人当り国民総生産額で先進国，後進国を分けると同様に危険である。「ヨーマンは封建慣習的な負担を負う限りにおいて完全な地主ではないけれども，その負担が近代的な借地契約による地代の支払とは著しく性質を異にするものであって，地代支払意識をもたず，かえって」独立自営の意識が強い。その点，「実質的には自由土地保有者も登録借地人も地主的存在」とみられる。厳密にはそのうちの自営農に限り，かつ年収40～300ないし400ポンドの層である。最多年収層は60～80ポンドで，80ポンド以下を小ヨーマン層とすれば「かれらの収入の特質は，ひとり農業収入のみではなく，手工業経営の収入からも構成されていたことである。すなわち家族の余剰労働力をもって梳毛紡毛に従事したし，しばしば雇人をも用いて手工業を遂行し比較的気楽な生活を送っていた」（徳増栄太郎「ヨーマンの研究，その概念規定」『商学』横浜高商，第35—36号（1942年）211ページ。なお秦玄龍『イギリス・ヨーマンの研究』未来社，1955年，戸谷敏之の遺稿『イギリス・ヨーマンの研究』1938年。

ある。①「原始共同体」様式，②「貢納」様式（先資本主義階級形態中で最も広く見られたもの：初期形態およびその発達した形態——例えば「封建」生産様式）③「奴隷所有」様式（歴史上，貢納制ほど多くの例には行き当らない）④「単純小商品」様式（頻繁に見出されるが実際にはには支配的生産様式となったことはまずない）⑤「資本主義」様式。これにつき，「生産様式」概念は抽象的なもので文明の全歴史期間について歴史的継起の順序を示すものではないと断っている。しかし，この図式をその順序どおりに辿ると所有と労働との一致——→不一致／不一致——→一致——→不一致と読むことができる。したがって無階級社会——→先資本主義階級社会の二形態——→擬似無階級様式——→資本主義階級社会というふうに読みなおすことも出来よう。）かれはさらに，単純商品経済の特徴を，純粋形態においては，自由な小商品者間の平等性とかれらの間における商品交換の組織とにあるものとし，かつこう付加えている。「この生産様式に基礎をおく社会はなかった。しかし，小商品関係が支配する領域——手工業がとくに農業生産から十分に分離された場合その生産領域はきわめてしばしば存在した。」(6)

しかし，このようなアミンの断定は北アメリカの二つの国についてはとにかくとして，少くとも南太平洋の二つのそれについては受け入れるのに困難である。原住民社会がこの両国にとり全く下層土となっていないかどうかに議論の余地があるばかりではなく，その歴史の原点に単純商品経済を置くことができるかどうかを疑う必要がある。オーストラリアに関しては別に述べたとおり(7)初期の歴史の主たるテーマはイギリス植民地政策の原構想が独立生産者社会を流刑囚を素材としてこの新天地に構築しようとした努力とその挫折とであった。流刑囚の奴隷労働のうえにイギリス毛織工業のため原料羊毛の商業生産を行なった牧羊資本家をもってアミンが自説の証明に使おうとしているならば，フィ

（6）Amin, 前出 pp. 13—15. なおアミンは農業生産が生活基本資料を充足し，その剰余が手工業の原材料となるという理解か。

（7）拙稿「オーストラリアにおけるヘンリー・ジョージ」『オーストラリア研究所紀要』第1号，追手門学院大学，1975年

ッツパトリックを読むことを促したい。いままでのところ，この25年も前に出た著書に代わるものは当らない。最近二人の若いマルクス主義者がこの国の階級の史的分析を試みているけれども，その自負するところに反して，この古典的著述の後継者となるにはまだ不十分である[8]。とはいえ，われわれ外国人には有難い資料の山がそこにはある。しかし，それが語る牧羊業者は随時に剰余を商品化する独立生産者ではなくて最初から首まで商品生産につかっている企業者である。それはすでに牧業資本主義（パストーラル・キャピタリスム）であり，先資本主義経済ではない。アミンはマルクス『資本論』の「植民理論」の章を読んでウエークフィールド以前すなわち1840年代以前には資本主義にとり否定の対象となるべき単純商品経済が成立していたと臆断したのではなかろうか。

## ニュージーランドの場合

ニュージーランドはオーストラリアと異なり流刑制度の母斑をもたず，むしろヨーマン社会として成立したかに思われがちである。しかし，カナダの社会学者 W. アームストロング[9]はこのアミンを紹介し同時にこれに反駁を加えている。その要領はこうである。

世界体系のなかで中心部にも周辺部にも属しない中間的社会構成群があり，その例としてカナダ，オーストラリア，ニュージーランド，アルゼンチンおよびウルグァイがあり，これらを自治領（ドミニヨン）資本主義社会と呼ぶとして，「この社会は数年にわたる数多くの議論の末に最近では共通性を否定され，中心（カナダなど前三国）と周辺（後二国）とに経済開発論では分けられてきている。」こ

(8) R. Connell and J. Irving, *The Class Structure in Australian History,* Melbourne, 1980. この著作は論証の資料を章末にまとめ本文をまるで裸にしていると評されるばかりでなく，そもそも階級理論を第一章で展開し第二章以下の歴史記述をその枠内で処理しようとし二兎を追って双方とも中途半端なものに終っている。

(9) Warwick Armstrong (Associate Professor of Geography, McGill University, Montreal) Canada, Land, Class, Colonialism : the Origin of Dominion Capitalism, *New Zealand and the World, in Honour of Wolfgang Rosenberg,* University of Canterbury, 1980.

の自治領群に最も注意を払うのはアミンである。しかし「アミンによれば前者三国は中心的社会構成となったが，その主因は単純商品生産体制と交換関係における相対的対等性とにある。それと後者二国を初めとする周辺的社会構成における土地保有集中構造と土地所有寡頭制＝買弁階級支配とは全く対照的である。」と。

この反論は次の四点に分けられる。

① 自治領社会構成のうちで単純商品生産様式の基礎のうえに発足したものはなく，寡頭制土地集中が植民初期の特徴である。

② 土地集中とともに地主，商人および金融業者——輸出特産物(ステープルス)の生産者とその仲介商——の支配階級が出現し外国資本との提携下に国の政治を左右した。

③ そのため自治領構成は完全な中心でも周辺でもなく両者の部分的特徴を併有する雑種社会へ発展した。

④ もっと議論の地平を拡げ，中心＝周辺モデルの代りに資本主義世界＝体系とその構成部分の性質と機能を説明する柔軟なモデルを開発する必要がある。

この最後の点はアナール派のウォラースタインらから発して最近流行のようになっている中心（核心）＝周辺のモデルに対する批判と受取ってよいだろう。これについて別にナヴァロが[10]この図式は産業化の優劣先後による配置であり，かつその配置を固定的に考える危険を含んでいると批判しているところも想起しておいてよかろう。もっと動的で複雑な現実に適合したモデルが必要なのである。

前の三点を念頭に置いてニュージーランド開発初期の資本＝労働状況を簡単に追ってみよう。この国がイギリス領土となるのは1840年原住マオリ族との間に結んだワイタンギ条約によるのだが，ちょうどこのころオーストラリアでは流刑制度が廃止を告げ，その前後にはマルクスが『資本論』第一部の最終章で

(10) Vicente Navarro, The Limits of the World—Systems Theory, *Science & Society,* Spring, 1982.

資本主義移植の植民理論として論評した前出ウエークフィールド[11]の計画移民がこの国に関しても積極的に推進された。その機関として組織されたニュージーランド協会の後身たるニュージーランド会社は政府に依存する必要のないだけの資本をもって，あえて政府の方針に反してまでもこの国の土地をマオリ族から買入れ移民を送りこむ。ワイタンギ条約成立直前の1840年1月に第一船が到着し間もなくウエリントン市が建設される。しかし，各世帯が自己労働で基本的生活資料を自給したうえで剰余の商品化により自由で富裕な「気楽な生活」をするには相当に高い生産力の先行蓄積とそれを生かすだけの社会関係とが必要である。利潤を追求する会社事業のもとの入植地ではそれは望めないことであった。会社には「どこにせよ平等主義の小規模自営農を基幹とする単純商品生産制を樹立する考えはなかった[12]。」「ネルソン地区では自給自足農民ではなく雇主と労働者，ジェントリーと下層階級とから成る[13]」資本の体制であった。資本は利潤に従って流れる。生産性の低い労働の搾取よりも自由な土地の投機へ向かっていっそう多くの資本が流れウエリントン，ネルソン，ニュープリマスの諸地区の土地購入者総数の半ばに達する不在地主が生まれ，灌漑，牧棚づくり，農耕，道路建設も進まず労働雇用の機会はかえって閉ざされたほどである[14]。1846年でもウエリントンからは羊毛のほかには木材など僅

(11) ウエークフィールドは1836年にイギリス下院に対しイギリス全植民地の土地処分について議会法として制定することを主張していたが，ニュージーランドに焦点を移し1837年5月計画移民のため New Zealand Association をつくろうとし12月には政府が王室特許状による法人化を認めようとしたが，協会はその条件を拒否する。ウエークフィールドはカナダに赴き，その不在中に同協会が議会へ法案を提出するが否決される。協会は38年株式会社に改組し，1940年4月にウエークフィールドは理事となり，会社本部に住居を構えて予備的探査に携わる。ただし39—40年はニュージーランドに没頭したが，かれ自身の最大の関心はカナダにあった。1840年10月政府は植民事業の機関として同社を認可する。(*An Encyclopaedia of New Zealand,* Vol. II. 659, Vol. III. 536—7. 1966)

(12) Armstrong, p. 37.

(13) W. B. Sutch, *The Quest for Security in New Zealand,* Wellington, 1966, p. 15.

(14) Armstrong, p. 37.

かな一次産品が海外へ向けられるだけであった。「ここでは週8シリングで一人の牧童が1000頭の羊を世話しており，牧羊に好適なこの土地ではほとんど労力を必要しないくらいで大量の農耕労働を要するイギリス式の混合農業を考えていたウエークフィールドの構想[15]」を裏切ったばかりではない。羊毛などの輸出代金は国の経済を支えるに十分ではなかった。高資本利潤を実現する輸入が起こる。「自給自足の家族農場は多くなかった。もし資本が輸入品の形態で送られてこなかったならば植民そのものが潰れてしまったろう。」そのなかで地主たちは「イギリス郷紳(スクアイア)のニュージーランド版たろうとして」下男，料理人，庭師を使い大地主にふさわしいシンボルたる調度を備えた宏壮な家に住み，大多数のものが掘立小屋で乏しい食料に生命をつなぐかたわらで妻君のためにパリへ靴を注文する[16]。自分の耕す土地がもてるという最初の了解とは違うではないかと抗議する人たちはイギリスへ帰って老年を授産場で送るのかとあしらわれる。「これらの地主が初期数十年間のこの国の支配者であった。ネルソン＝ワイラウ牧羊業者グループのなかからだけでも四人の首相と二人の議院議長とを出している[17]。経済成長が始まる1870年代になるとイギリスおよびヨーロッパ資本の流入により政府の開発事業にともなって土地は値上りし王室からの土地払下げも活潑となり，カンタベリ地区では72—78年鉄道建設の進むにつれて一年で2回ないし3回の土地ころがしが行われた[18]。オーストラリアと同様にスクワッターが活躍しあらゆる手段で土地の集中独占を行った。その背後には銀行や土地金融会社があり，ついに1880年代の不況期には債務にしばられた地主もその支配下に隷属化する[19]。

もちろん，このような資本の専制があったからといってカースト制や封建身分制のうえに構築される資本主義と混同し同一視することは危険である。ただ

(15) Sutch, p. 20.
(16) Sutch, pp. 20—22.
(17) Sutch, pp. 21—22
(18) Armstrong, p. 39.
(19) J. D. Gould, The Twilight of the Estate, 1891—1910, *AEHR*, March, 1970. pp. 1—26 をみよ。

アミンがいったような，アメリカやカナダの歴史的事例と同列に論じうるような独立生産者の単純商品経済がこれらの二国で資本主義に先行したと断定することはできないというだけである。

それでは何故アミンは，このような枠をはめたのか。また論理的にいって確かに独立生産者のもとで成立する自由平等な個人の合理的行動がなければ労働力商品の論理的発展はあり得ないのだから，この両国の資本主義的成熟のそうした基礎をその歴史のなかのどこかに求めなければならないのだが，その答はどうなるのだろうか。この問題に立ち入るのに先立って硬貨の他の半面を裏返してみよう。

## 2

「若い中心」の反対極に挙げられるアルゼンチン，ウルグアイに共通する特徴は，一方において先資本主義生産様式が少くともその観念形態として農村を強く支配しているうえを大土地所有制（ラテイフンデューム）が網の目のように覆っておる反面，他方には近代資本主義制度にコミットした商業＝金融業資本が都市に根をすえていることである。前者によって生産されるのはイギリス市場ないし世界市場向けの輸出に特定された商業一次産品である。後者はこの特産物の流通過程に介入し，輸出先の資本と結託して，ただし目下の提携者として中間利潤を吸収する。それらは外国資本でなければ広義の買弁資本であることが通例である。いいかえれば国内で生産された剰余価値の大部分は外国へ移転しそこに蓄積されるのだが，その通路に介在して分け前に与かるものである。両国ともに自治領（あるいはヨーロッパではドイツなど産業化後発国）と異なり，保護政策を採用して自国の生産流通を守るのではなく自由貿易の名のもとに自国を自由な従属市場として開放するものである。従属関係が買弁階級を生み買弁の活動がその関係を強化する方向へ働く。

大土地所有は輸出向け一次産品の企業形態たる植栽農場（プランテーションコノ）[20]の基礎でもある。大土地所有の点では両極の間に一見差異はないけれども，ラテンアメリカでは征服後の政治的縁故者に対する分配物であるのみならず原住民など異人種異民

族の奴隷労働ないしは契約労働による前近代的搾取，むしろ収奪であった。これらの労働形態に徹底的に抵抗して近代労働形態を貫ぬいた南太平洋の両国とはその間に本質的な差異がある。それぞれ質的にちがいのある観念形態がこれに対応する。後者においては独立生産者の自由平等の倫理が貫徹している。

## 買　　弁

ポルトガル語の comprar 購買から出た買付人のことで占領時代のわが国にあらわれたバイヤーを想起させるものがある。19世紀アジアへ進出したヨーロッパ資本の前に聳えた文化障壁と中国においてみられた官設の行商による貿易窓口の国家的一元化とが早くからこの種の階級を生み次いでアヘン戦争の結果たる1842年の南京(ナンキン)条約により官庁統制の廃止をみたのちは民間の独立商人がそれに代った。インドではアカダムと呼ばれるが中国では買弁として知られた。中国における買弁にはかつて根岸佶の古典的研究[21]がある。

外国商人は官設の行商の廃止により利益した反面において行商が保証してきた中国人との貿易取引の危険をすべて自ら負担しなければならなくなり，さらには買弁に依存する程度によって却て不利益をこうむる。「全盛時代の買弁は独り利権を壟断し」売買当事者双方から手数料の二重取りをするばかりか時にはその地位を利用し自己売買を試みて私腹を肥した。その生活は豪奢を極めもした。「この時かれらは既に一家を成し大金を儲け，あるいは官位を買いあるいは頂戴を冠し大輪に坐し，肥馬に難ち意気揚々として得色ありしを見るべし。[22]」「現在＜根岸の執筆当時＞とても買弁の地位は青雲を希望する中国壮

(20) 広義のプランテーションは中央管理下の農業エステートで多数の家族外労働者を雇用した。奴隷以外には貨幣賃金ないし現物賃金を支払うもので古代ローマのラティフンディアからアメリカ合衆国西部諸州の牧場，カリビア海諸国の資本集約的蔗糖エステート，ペルーの労働集約的綿花エステートなどを含むものである。F. L. Pryor, The Plantation Economy as an Economic System, Review Article, *Journal of Comparative Economics*, 6, 1982, pp. 289—297.

(21) 根岸　佶『買弁制度の研究』日本図書，1948年。

(22) 『北清見聞録』明治21年（1988）から根岸の引用（279ページ）

年の標的である」[23]。

買弁は外国商社の使用人であるよりは契約により対等な立場で招聘された専属の問屋であり契約期間中は正当な理由がなければ互いに関係を解除できないものであった。その専属者たる給与に前記の手数料と自己責任による別途の私収入という三つの源泉の収入を物質的基礎として，かれらは「一種の紳商」「士太夫」たる社会的地位を獲得する。しかし国内民衆からみれば，かれらに不等価交換を強いる外国資本の手先であり，外国資本からみれば必要悪同然の協力者である。それゆえ革命にとっては攻撃の対象となり外商にとっては排除できなければ使用人化したい対象となる。直接取引を図るのはアメリカ商人であり，使用人化の方向を狙うのはイギリス商社であった。ドイツ人のみは合弁方式による利用を考えた[24]。

近代日本においても開港場において外国商館に勤務する商館番頭が買弁に近い機能を行ったが，使用人であって独立商人ではない。独立商人たちが買弁化できない社会的雰囲気が日本にはあった。すなわち商権回復が明治日本のナショナリズムの要請であって貿易実務を身につけるため一定期間使用人として雇われてもやがて独立して競争者となるのがかれらの進退であった。これが日本側の一つの大きな動力であったろう。かれらは日本の運命にコミットしていた。それに反して自国の伝統にも西洋の教養にも深い士太夫であっても買弁は自己の金銭的利益以上にコミットするものを持たなかった。衰頽する清朝中国

---

(23)　根岸，230ページ

(24)　同4，76各ページ。「新機軸を出したのは米国である。米国は沿岸租界や奥地商埠に定住する信用なき華商と代弁商契約を締結し現金制度により商品を販売せしめ，その報酬として給料ないし手数料を交付し中国の悪弊たる中間収取を厳禁し，本店から直接検査員を派遣し各地の代弁商を巡視し業務の検閲，取引状況の調査，代金の取立，販路の拡張等をなさしめる。この制度の特徴は単に買弁を廃止するのみならず洋行その他幾多の中間的な仲介を排除してなるべく直接消費者に商品を販売せんとすることに存する。しかして買弁廃止より生ずる取引の危険を防止するため現金支払を採用している。」この背景には銘柄商品の大量生産，大量需要創造，販売価格の引下げというアメリカ企戦業略があり「他国の及ぶところではない。」（根岸，328ページ）

の所産であったといってよかろう。ラテンアメリカにおいても矛盾に満ちた社会のどれかの部分に自己を賭けることのない買弁は農村の近代化に，国家の自立化に対し全く中立であるほかはなく，したがって資本主義移行にも非資本主義の道への展開にも起爆力とはなり得ない。

## 孫文の道

老衰の祖国と帝国主義勢力との間にあって政治に命運を捧げた，およそ買弁とは対蹠的な例として孫文を挙げることができる。もっともラテンアメリカに事例を求めるべきかも知れないけれども歴史記述ではなく類型を比較するのだから対照的であればあるほど良いだろうから，偶目した一論文(25)を引き合いに出す。それによれば，かつてマルクスはイギリスのインド支配に関連して先進国の介入は新しい未来を後進の開発途上国に対して開くものであり，後進国の将来の姿を示すものであると論じたのに反して，最近の第三世界を背景にして展開されたポール・バランやアンドレ・フランクらの従属理論は先進国の経済発展はそれとともに低開発の深まりをもたらすものであると説く。この両者のいずれにも属しない第三の道として一部の帝国主義勢力と結び従属関係を相互協力関係へ，搾取関係を相互利益関係へ転化したのは孫文であり，民族の政治的主張と文化的連続性とを最も重視した。後年の台湾の経済的独立の成功はその戦略の有効性を立証しているというのである。三つの道はそれぞれ19世紀中葉，第二次世界大戦後および両大戦間期とに時間的に配置されるが他方三つの理論類型としてみることも出来よう。マルクスはイギリスの帝国主義膨張における植民地の二つの類型：異民族征服植民地と白人入植地の区別を無視したと批判できるかも知れないが，かれはむしろインド民衆の精神を緊縛してきた呪術的宗教的形而上学的観念形態が資本主義のもちこむ商品の体現する合理主義により解体させられる点に重点を置いたのである。（ラテンアメリカの場合にも延長して論じられるであろう）。この合理精神は抽象労働価値がもたらし

(25) A. James Gregor & Maria Hsia Cheng, Marxism, Sun Yat-Sen and the Concept of "Imperialism", *Pacific Affairs*, Spring, 1982.

た近代の所産であり独立生産者様式が市場経済のなかで発見し実践したものであるといえよう。近代イギリス社会の延長たる植民地，オーストラリア，ニュージーランドにおいてはこの点インドと対蹠的なものがある。

他面，資本主義以前の状態にある非ヨーロッパ社会においては所有と労働の一致が基底にあるけれども経済外圧迫強制によってその生産する剰余が神の御名，君主の大義のもと支配階級へ吸いあげられてゆく，前述のいわゆる貢納制生産様式が存在していた場合，資本はこの精神的支配を破壊すると同時にその基底にある所有と労働の一致をも一掃してしまう。非ヨーロッパ「後進」地域はいつそうの後進性，低開発の深化，development of underdevelopment を強いられる。従属理論はそれを突いている。

この深淵から脱出するため「ヘーゲルのお気に召した表現でいう……否定の否定」を図るには経済の法則に対抗し突破口を切開く政治が必要となり，その政治の手段は人びとを結集する内面的力をもつ文化（何よりも言語文化）の同一性と外面的力の所在する国家とを主たる根拠とするのが最も適当であろう。変革勢力が，敵の敵は味方であるという論理にしたがって一部の帝国主義国家勢力を利用することは正しい戦略であるということができる。脱植民地化が大体の傾向となった第二次世界大戦後においては政治的独立が経済的独立の挺子となり，かつそれによって裏付けを得るのである。買弁が成功する余地は残されていない。各民族が多かれ少なかれ戦う共同体であった限り。

## 3

自由，平等，独立で合理精神の担い手による単純商品交換は貢納制とそれを支える観念形態との不合理性に挑戦する生産様式として論理的に近代資本主義の前提であると同時に，事実封建制の母胎を喰い破って資本主義社会が生まれ出るときの起爆剤として働いた。社会の支配的生産様式としてあらわれたことはアミンも認めるとおり歴史のなかにほとんどこれまではなかったことであるが，そのような起爆力を発揮したことは前にグールドナーの所説を引用して述べたとおりである。その際，筆者はグールドナーのマルクス解釈に対して意見

を留保しておいた。その理由は「市民社会」の概念規定において決定的な喰い違いがあるからであり，それゆえに「市民の共同体」なる余り熟さない用語を敢えて採ったのである[26]。

## 市民社会

辞典によれば[27]，「市民社会」にはこれまでに3～4つの用法があり「市民共同体」で表現しようとする「自由平等で理性的な個人の自発結合関係」はその一つとして，「ブルジョア社会の構成原理を理想型化したもの」である。他は「1）資本主義社会ないしブルジョア社会，2）政治国家に対比され，あるいはこれに対立する経済社会」であり，また現代の第四の用法として機械社会＝大衆社会に対比される概念でもある，と。それに反して，グールドナーの場合はむしろ資本主義生誕の原点における歴史的経験であり，マルクスからの引用はその一事例にほかならず，時を隔て所を異にして西ヨーロッパ諸国において，断続的にか連続的にか見方によって異るかも知れないが，体験されたところである。1789年フランス革命もその一つに数えることができる。その間に主敵にも戦う側の隊伍にも組み方の変化があるとしても所有と労働の一致をめざす方向は変らない。しかし，また勝利に時間の差があり，その前後の発展に不均衡がある。「先進国」においては市民社会そのものの変質が起こる。マルクスによれば，市民社会なる用語そのそのが「18世紀において，所有関係が古代中世共同体社会から既に自己を解放してしまっていたときにあらわれる[28]。」それは「生活の物質的条件の緩和」を意味し，その解剖学が経済学となる[29]。かれはまた，この概念をヘーゲルが構築したものであるとして，「この緩総をヘー

(26)　拙稿「近代資本主義と市民の共同体」『城西大学経済経営紀要』1982年6月号。
(27)　松下圭一「市民社会」『経済学辞典，第2版』大阪市大経済研究所編，岩波書店，1979年。
(28)　「市民社会そのものはブルジョアジーとともにのみ展開した。」これらがグールドナーにかみつかせた文句だろう。『ドイツ・イデオロギー』花崎杲平訳合同出版「新版」1966年163ページ，C. J. Arthur (ed.) Laurence & Wishart, 英語版1970年では「時代の幻想」と小見出しがあり，p. 57.
(29)　『経済学批判』緒言

ゲルは18世紀におけるイギリス人やフランス人の先例にならって市民社会と名づけて総括した」と述べているが，論者[30]によれば国家公民性，商業およびクリスト教という三者の間の関係をどう設定するかという18世紀の問題からヘーゲルは市民社会概念へ到達したのだという。かれにとっては家族，市民社会および国家という倫理生活の三様式があり，それぞれ特殊的愛他主義，普遍的利己主義および普遍的愛他主義を代表する契機をなしている[31]。市民社会は市場における人間の物質的欲望の充足関係である。「(市民社会は) 孤立している諸個人の相互関係に依存する不自然な共同社会である。しかし，それにもかかわらずそれ自身の論理によって個人を国家体へと導いてゆく共同社会である。」「市民社会の個人たちは経済学の抽象する法則に当面し，経済的破滅を免れるために自分の意見を曲げる。」「市場的相互関係において各個人は単純に自分自身の利益のみを追求することはできない。もしそうしたならば市場の構造は各人の欲求を満足させるようには出来ていないことを知るだろう。市民社会の構成は個人をして『普遍的な仕方で』認識し意欲し行動するように仕向ける。こうして個人は『関係の連環に参加する』。この連環が市民社会である[32]。」

ヘーゲルとマルクスとの間には一方が市民社会を非歴史的に捉え[33]他方が歴史性において論じるという相違はあるとしても，偉大な頭脳に映った市民社会そのものは自由よりもいまは富裕を大切にし，戦うために共同体の主要部分であった政治権力を政治国家として自らから切離して対置するなどの点において，かの市民共同体の対蹠点に到着しているのである。

このような市民社会の定着が産業革命以後最初の長期経済下降局面を克服し得た1860年代においてホブズボームのいう「資本の時代」となる。資本主義なる用語自体この60年代の産物である。それはこの著者をして「ここで扱う時代

(30) James Schmidt, A Paideia for the 'Burgs als Bourgeois', *Hist. of Pol. Thought*, November, 1981.

(31) Shlomo Avineri, *Hegel's Theory & the Modern State*, Cambridge 1972, pp. 133—4. 高橋良治訳，未来社 212ページ。

(32) Schmidt, p. 491.『……』はヘーゲル『法哲学』から，と。

(33) Do., p. 487.

に対するある種の嫌悪，むしろある種の軽蔑に当るものを隠すことができない[34]」といわしめる時代であった。その最も直接的な現象として同書第13章「ブルジョアの世界」以下に記述されるところは興味深い。この著述の大きな特徴であり功績である点はこの分析にあるということができるだろう。

## 南太平洋の市民社会

さてここで，われわれは最初の課題となった南太平洋の二つの国の資本主義社会へもどることができる。この国々はこの60年代においてそれに先立って形成された経済構造=階級構造のうえに最初の経済成長を遂げて資本主義の軌道に乗るのである。その資本主義はイギリスの延長である限り，アミンのいうような来歴に事欠かぬものであり，その来歴は観念形態のなかに一つの理想としてこれらの国々においても伝承されているのである。

しかし，歴史的経験はそのもととなった体験を想起させるような遺跡遺物によって不断に充電されていなければなるまい。その点で新しい風土は不利である。独創的な思想を，伝承したもののうえに追加しうる利益はもちろんある。しかし，少くとも最近までのオーストラリアにはその冒険はみられなかったといってよい。イギリス人がこの新天地開拓に用いた手段はハンコックのいうとおり[35]「既成(レディ・メイド)の文明」である。かれらが相続してきたのは「情熱の衰えた時代の理性に富んだクリスト教」であり，「軽薄な合理主義その他19世紀の一切のイズム」であり，「農村文明と土への愛着」の代わりに「工場と加工農場と階級闘争」であり，「社会学の教授たちが書いた教科書」であった。その教科書が多く時代おくれであるばかりでなく，オーストラリアは「伝統が支配し，人びとが冒険的な思考をする中心から遠く離れているため」必然的に時代におくれており，「技術においても感覚においても一シーズン前の流行」を受けとっている。アミンを失望させるかも知れないが，「かれらは農村ジェントリーの基準

(34) E. J. Hobsbawm, *The Age of Capital*, London. 1975, p. 1, 5. 柳父ほか訳，みすず書房，1，6各ページ。

(35) W. K. Hancock, *Australia*, London, 1930, p. 32 など

を拒否し，……そして都市ブルジョアジーの基準を相続した[36]。」しかも，「パックス・ブリタニカの傘の下に育ったことがこの国を好運（ラッキー）な国にした最大の理由である」から，この傘がパックス・アメリカナへ代わったのちは19世紀とは比較にならない緊張動揺の世界，特にアジアに直面しているので（この点はニュージーランドも同じ），既成の文明から離れる契機に恵まれている。ハンコックをして「自分自身の価値を創造するか，自分の力で旧い価値を＜当然新しい条件の下で＞再発見しなければならない（力点―引用者）」といわしめたその時期が到来している。しかも，あるインド人教授がかれに対して「あなたがたがヨーロッパから相続したものを否定してしまうのならば，わたしどもにとっても無用な人たちになります」といったという[37]が，そのとおり旧い価値の再発見のうえにこそ新しい自分自身の価値を創造すべきである。

（1983. 1. 14）

(36) Do. p. 285.

(37) Hancock, *Professing History*, Sydney, 1976, p. 167.